

## 今日の説教のポイント<マタイによる福音書 14 章 1～12 節>

ここに登場する人物の中の、ヘロデ・アンティパス、バプテスマのヨハネ、イエス・キリスト、そして私たちのことを考えます。

### ①怒りより哀れを覚えさせられるヘロデ。

ヨハネの首をはねさせた残酷極まりないヘロデ。しかし、ヘロディアにそそのかされ、愚かな面子にこだわり、犯した罪に内心慄いている姿に、怒りより哀れを覚えさせられます。彼とヘロディアの最後は追放地での死です。しかし死に方はどうでもいいのです。自分の欲望追求しかなかった人生であることが哀れなのです。

### ②同情より憧れを覚えさせられるヨハネ。

良くないことは良くないと領主に言い切り、その結果、突然人生を終わることになったヨハネ。しかし、彼はなすべきことをなして生き切ったと思わされます。それは、命の与え主にしてこの世界の造り主なる神様と深くつながり、救い主の到来を告げる大役を果たしたと思わされるからでしょう。死に方はどうでもいいのです。生も死も支配し給うお方を思いながら生き切れたことに憧れを覚えさせられるのです。

### ③ヘロデの発言から分かるイエスの姿。

ヘロデはイエス様のことを聞き、「あれは洗礼者ヨハネだ。死者の中から生き返ったのだ。だから、奇跡を行う力が彼に働いている」(2)、と言ったとあります。これから分かることは、ヘロデはヨハネを殺したことに内心慄いていたのだということと共に、イエス様がヨハネと同じ方向の姿を示されていたのだということです。ある注解者はこう言っています、「ヘロデの論評は、イエスは正しくヨハネの後継者であるということ、そしてそれは、イエスはヘロデの支配にとってはヨハネと同様に、政治的な脅威であるということ」(D. R. A. ヘア) と。

### ④ヨハネを見、イエス・キリストを知った私たちの行くべき道は？

信仰は、私たちに、「外で何が起こっていても恐れる必要はない、神から目を離さなければ」ということを教えてくれます。しかし、それは、「外で何が起ころうともそれに目を向けない、かかわらない」ということではありません。真に恐れるべきものを恐れるが故に、それ以外のものを恐れなかったヨハネに倣いたいと思います。